社会貢献活動

環境コミュニケーション

［環境配慮方針1-❺］皆さまと一緒に環境に配慮したライフスタイルを考えます
［環境配慮方針2-❷］環境に関して皆さまとコミュニケーションを深めます

取組み方針

地域の人々とともに自然環境とのふれあいを楽しみながら、地域ごとの特性に応じた地球環境や地域の自然にやさしい暮らしを培う場や仕組みづくり等を、地域にお住まいの方々とのパートナーシップにより進めます。

また、ステークホルダーの皆さまと積極的なコミュニケーションを行うことで、真に求められるまちや住まいのあり方を模索し、環境にやさしい持続的発展が可能な都市への再生を進めます。

事例紹介

大学との協働による団地環境の魅力発掘

URは、大学等との協働により、自然環境に配慮した魅力的な居住環境の創造・維持や、新たなコミュニティデザインの模索等に取り組んでいます。

サンヴァリエ中百舌鳥（大阪府堺市）では、大阪公立大学緑地計画学研究室との協働により「公大×UR 屋外活用プロジェクト」を進めています。このプロジェクトは、当団地の屋外環境整備を契機として、「より楽しく豊かな暮らしを実現できる住まいづくり」を目指し、団地の屋外環境を使いこなす継続的な仕組みづくりを目的としています。

令和４年５月のワークショップでは、大阪公大の学生考案のゲームを通じて、「団地屋外でやってみたいこと」のアイデアをまとめました。ジャズダンスやアイススケート、映画鑑賞等、思ってもみなかったアイデアが生まれ、屋外環境の使いこなし方の大きな可能性をお住まいの方々と共有できました。次回以降は、ワークショップで生まれた「屋外使いこなしアイデア」を実現するイベントを実施予定です。

また、泉南尾崎団地（大阪府阪南市）では、大阪芸術大学との協働により「アートプロジェクト」を実施しています。このプロジェクトは、アートを通じて新たなコミュニティデザインのあり方を模索し、団地の魅力創出を図ることを目的としています。

令和４年10月のイベントでは、大阪芸大の学生企画によるファッションショー、空き住戸での写真展示会、焚火音楽祭を行いました。ファッションショーや写真の企画では団地の屋外空間が撮影の舞台となり、団地や地域の魅力を再発見する機会となりました。焚火音楽祭では、たくさんの人が焚火の周りに集まり、様々な交流が生まれました。「引っ越してきたばかりで知り合いがいない」という方が他の居住者の方と交流する姿や、家族や友達同士で参加する姿も多くみられました。

今後も、様々な関係者と連携した取組みを継続することにより、自然環境に配慮した魅力的な居住環境の創造・維持や、新たなコミュニティデザインによる団地の魅力創出を図っていきます。

担当者の声

学生の楽しいアイデア満載のイベントを通して、お住まいの方々とともに、団地屋外環境の魅力を発見、再認識できました。サンヴァリエ中百舌鳥の屋外活用プロジェクトは、今後は屋外環境をより使いこなすイベントの検討段階からお住まいの方々が参画する予定であり、楽しみにしております。また、お祭り等の行事がなくなってきているという泉南尾崎団地でしたが、今回のアートプロジェクトでは予想を超える多くの人が集まり、人が繋がるきっかけをつくることの大切さを感じました。広場等、人が集まることのできる空間が多くある団地の居住環境を活かし、人と人が繋がる団地の暮らしの魅力を発掘していきたいです。

サンヴァリエ中百舌鳥

学生考案のゲームを楽しむ様子

お住まいの方々と学生の交流

アイデアをジェスチャーで表現

屋外を使いこなすアイデアの発表

泉南尾崎団地

ファッションショーの撮影風景

焚火音楽祭

環境に配慮した ライフスタイルに向けた取組み

環境に配慮したライフスタイル

環境にやさしいライフスタイルを支援

地域の方々とともに、自然環境とのふれあいや環境にやさしい暮らしを培い、継承していくことを支援したいと考えています。

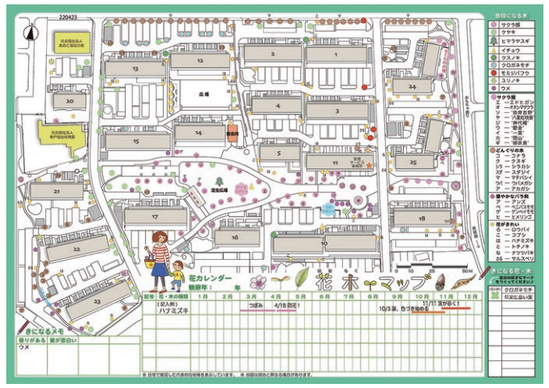
事例紹介　**じゅもくウォーキングイベント、樹名板づくりイベントの開催**

青戸第一団地（東京都葛飾区）において、団地の豊富な緑の環境を活かした多世代交流を目的として、春の桜の時期と秋の紅葉の時期に、団地自治会と連携したじゅもくウォーキングイベントと樹名板づくりイベントを開催しました。

企画段階から専門の樹木医の先生に参画いただき、「知らない木の話が聞けて良かった」、「団地内の散歩が楽しみになった」、「さらに知見を深めていきたい」等の声も聞かれ、子どもから高齢者の方々まで幅広い世代の方にお楽しみいただくことができました。

イベントでは団地内の花や木を記した「花木マップ」も作成しました。作成した「花木マップ」は管理サービス事務所に常備し、これをお住まいの方々や地域事業者の方に継続的に活用していただくなどして、今後も団地環境を活かしながら、多様な世代が生き生きと暮らし続けられるコミュニティ形成に取り組んでいきます。

春：ゲンペイモモ（バラ科）の鑑賞



花木マップ

樹名板作成の様子

完成した樹名板

担当者の声

参加された方が、好奇心一杯の表情で樹木医の話を聞く姿や談笑する姿に大変感銘を受けました。今後は本イベントの取組みに併せて作成した「花木マップ」を団地居住者の方に活用いただき、樹木医の方も驚かれていた団地内の豊富な種類の樹木やお花を楽しんでいただき、これがコミュニティ形成の一助になればと期待しております。

事例紹介　**電動パーソナルモビリティシェアリングサービスの実証実験の実施**　緩和策　NEW

福島県大熊町から委託を受け、令和４年11月から12月まで電動パーソナルモビリティを使ったシェアリングサービス「おおくまGOGO!シェア」の実証実験を行いました。

2040年にゼロカーボン達成を目指す大熊町において、エコで気軽に利用できる地域交通サービスに関しての利用者の移動ニーズ把握や運営面の課題検証を目的とし、寒い中多くの方にご利用いただきました。

本実験では、学生団体と連携し、観光ツアー等のイベントでの活用を想定したワークショップも開催。エコで静かに走る電動モビリティは好評で、単なる移動手段にとどまらず、環境意識の醸成や、観光コンテンツとしての可能性の模索にも繋げることができました。

電動モビリティを活用したまちの魅力発見ツアー（学生ワークショップ）

事例紹介　**東京都内のUR賃貸住宅として初めてEV（電気自動車）充電設備付き駐車場を試行設置**　緩和策　NEW

令和５年１月、ひばりが丘パークヒルズ（東京都西東京市・東久留米市）にユアスタンド株式会社と連携し、電気自動車（EV）充電設備を２台試行設置しました。

EVはガソリン車と比較して、走行時の温室効果ガス排出量が大幅に少なく、車体の製造から廃棄までの全ての工程における環境負荷においても、20～30%温室効果ガスの排出量が少ないため、EVの普及によりさらなる温室効果ガス排出量の削減が可能と言われています。※

URでは、温室効果ガスの排出削減に資するよう、EV充電設備の試行設置を進め、UR賃貸住宅にある駐車場への本格展開を検討してまいります。

EV充電設備付き駐車場

▼詳しく知りたい方はこちら
※参考：環境省ホームページ
https://www.env.go.jp/air/zero_carbon_drive/

UR賃貸住宅にお住まいの方への環境配慮の呼びかけ

バルコニーでの緑のカーテンづくりを支援する等、環境配慮の呼びかけを行っています。令和４年度は、栽培キットや苗を約170団地、約5,300戸の住宅へ配布・提供しました。

建築物の環境性能の向上

環境性能の向上及び品質確保の促進

建築工事や土木工事等に、施工、工事監理、検査業務に関する技術基準を策定し、それらに則った厳しい品質確保を行っています。また、新規に建設するUR賃貸住宅では「住宅性能表示制度」による第三者評価を取得しています。住宅性能表示の実施について、募集パンフレット等へ設計住宅性能表示を記載し、お客様への情報提供に努めました。

今後は、「建築環境総合性能評価システム（CASBEE）」等による評価等を通して、環境性能の向上に努めていきます。

環境に関して皆さまとコミュニケーションを深める取組み

UR賃貸住宅にお住まいの方等とのコミュニケーション

地域やお住まいの方とのコミュニケーション

UR賃貸住宅や地域にお住まいの皆さまと一緒に、ワークショップやイベント開催等を通してコミュニケーションを図り、環境配慮に向けた連携を進めています。

事例紹介　団地再生事業現場で子ども向け見学会実施　NEW

令和４年８月、澄川団地（北海道札幌市南区）で子ども向けの工事見学会を開催しました。

澄川団地では団地再生事業を進めており、３棟の解体工事を実施。工事が進む中、団地にお住まいの方からご提案いただき、普段は見られない工事現場を子どもたちに見てもらおうと、解体の施工業者と共同で見学会を開催しました。

当日は澄川団地や近隣の子どもたち、保護者等19名が参加。始めにレクチャーの時間を設け、なぜ団地再生事業をやっているのか、解体工事の進め方、工事の廃材が道路等にリサイクルされる様子を動画を交えて説明しました。その後現場へ入ると、大迫力の重機や目の前で解体されていく住棟を見て、子どもたちは目を輝かせていました。

最後は参加者と現場の作業員全員で、解体住棟と重機をバックに写真撮影。見学会を通じて、事業の意味、工事における環境への配慮を知っていただくことができました。長年の役目を終えた住棟に感謝とお別れを告げるとともに、解体された住棟はその後どこへいくのか？ということを考えてもらう良い機会となりました。

迫力満点の解体作業に興味津々

担当者の声

間近で動く重機を食い入るように見る子どもたちの真剣な目が印象的でした。子どもたちの中には以前より万能鋼板の隙間から工事の様子を毎日のように見に来てくれている子もいて、将来を担う子どもたちに工事現場を知ってもらう良い機会になったと施工業者の方も笑顔でした。今後も子どもたちに環境やリサイクルのことに興味を繋げてもらえるよう伝えていけたら良いなと思います。

事例紹介　団地内自然林を活かした環境学習等の実施

江南団地（愛知県江南市）には、団地建設時から残る３か所の自然林があります。市内でも貴重な緑であるこの自然林に関して、令和元年12月に自治会とワークショップを行い、樹木の適切な維持管理や、森の資源を活かした多様な主体による取組み等についての方針を検討しました。方針をもとに、江南市と協働した環境学習会の開催や自然林の資源を活かした様々な活動を行っています。

令和４年４月には、団地に自生する苔を利用したこけ玉づくりやフリーマーケットを実施する「江南団地 森のマーケット」を開きました。このイベントは前年度に整備が完了した団地内の広場で行い、広場の愛称もイベントの参加者投票によって「ふれあい広場」に決定しました。別の日には広場の植栽を解説するツアーを行い、団地にお住まいの方が身近な緑とふれあい、愛着を形成する取組みを行いました。

令和４年10月の環境学習会は、前年に引き続き「かぶとむし幼虫教室」、「どんぐり教室」という２つの題材で開催し、延べ30人以上が参加しました。「かぶとむし幼虫教室」では、自然林内に設置されているコンポストの中からかぶとむしの幼虫を探しました。幼虫を探した後には、自然林内の剪定枝から作成したチップを土に混ぜ込み、かぶとむしの産卵に適した土をつくることで、かぶとむしの生態を通じた自然環境との関わり方等を学びました。「どんぐり教室」では、自然林内に落ちているどんぐりを集め、苗床に植えました。その後、どんぐりの絵付け体験をし、団地の自然林を守っていくことの大切さやどんぐりのなる樹木について学びました。環境学習会は令和２年から今回で３年目の開催となり、江南団地に残る自然林と身近な緑の環境について子どもたちが学習する機会となっています。

このように江南団地では、地球温暖化の緩和や生物多様性にも寄与する団地の豊かな緑を、貴重な資源として活かし、環境教育や地域コミュニティ形成、団地活性化に繋がるような活動を継続していきます。

森のマーケット

かぶとむし幼虫教室

どんぐり教室

植栽解説ツアー

事例紹介

「ふるぎの未来」プロジェクトの実施

緩和策　NEW

令和４年１１月、星の原団地（福岡県福岡市）にて、中村学園大学短期大学部キャリア開発学科による「ふるぎの未来」と題したプロジェクトを実施しました。

中村学園大学とURは、団地における子育て・高齢者支援・地域経済の振興等の様々な分野に関する諸問題に対応し、その活性化を図るため連携協定を締結しており、「ふるぎの未来」はその一環のプロジェクトです。

「ふるぎの未来」は、学生のアイデアをもとに実施したもので、URがリメイクを希望する高齢者の方々から思い出が詰まった洋服やサイズが合わなくなって着ていない洋服を事前にお預かりし、それを学生たちがリメイクし、役目や形を変えて高齢者のお手元にお返しするプロジェクトです。

裁縫経験が少ない学生たちでしたが、それぞれ情報交換しあいながら、それぞれの感性でリメイクを進めていき、星の原団地の集会所にて、古着を提供していただいた高齢者お一人お一人にお返ししました。

「ふるぎの未来」プロジェクトは、学生と高齢者の世代間コミュニティ促進が図られるとともに、新しい服を生産するために必要な原材料の削減、廃棄物削減等環境負荷軽減に寄与した取組みになっており、今後も継続していきたいと考えています。

リメイクの前後を皆さまにプレゼン

事例紹介

フードロス解消を目指した規格外野菜の出張販売

緩和策　NEW

令和４年７月、荒江団地（福岡県福岡市）にて、中村学園大学短期大学部キャリア開発学科による「フードロス解消を目指した野菜、加工品の出張販売」を実施しました。

本プロジェクトは前年にも実施しており、２回目の開催となります。

当日は、フードロス解消に関心を持っていただくために、規格外野菜や加工品等を格安で販売し、若い方から高齢者の方まで多様な世代の方々が買い物にいらっしゃいました。会場では、訪れた人が野菜の産地や賞味期限と消費期限の違いについて学生に質問し会話を楽しむ姿や大量に買い物した高齢の方の買い物袋を学生が自宅まで運ぶ様子が見られました。

この取組みにより、フードロス解消の意識向上、環境負荷軽減が図られるとともに、外出機会の創出やコミュニケーション促進等団地や地域のコミュニティ活動促進に繋がっていくことを期待し、今後も継続していく予定です。

出張販売の様子

担当者の声

自宅のすぐ近くで大学生と楽しく会話をしながら買い物をする。そして、そのことがフードロス問題の解消に繋がっていく。この企画から、地域で環境への取組みを無理なく継続していくためのヒントを我々も大学も学びました。

事例紹介

行政や民間企業とともに、団地の屋外空間利活用の実証実験イベント（花見川団地マルシェ）を開催

NEW

令和４年５月に、「千葉市、株式会社良品計画、株式会社MUJI HOUSE、独立行政法人都市再生機構の連携協力による花見川団地を拠点とした地域生活圏の活性化に関する協定書」（以下、連携協定）の締結を行いました。

花見川団地（千葉県千葉市）には公園や広場が多くありますが、活用しきれていない実態があったことから、連携協定の締結内容において、「団地共用部等（公園、広場、施設他）を活用した賑わい、交流事業の実証実験」に取り組むこととしており、その第一弾として令和４年１２月に実証実験イベント（花見川団地マルシェ）を実施しました。

開催にあたっては前述の４者だけではなく、団地にお住まいの方で構成される団地自治会の皆さまや、花見川団地商店街振興組合の皆さまにもご協力をいただきました。

今回は、団地中央部の公園（中央公園）と、隣接する花見川団地商店街を会場としてイベントを行いました。公園ではキッチンカー等の飲食ブース等の設置や無印良品による防災イベント（いつものもしも）、モルック体験、路線バスの展示等、商店街では無印良品のPOP-UPストアや団地自治会の出店等が行われました。

当日は、団地にお住まいの方を含め多くの方々に足を運んでいただき、大いに賑わっていました。

今後も実証実験を重ねることにより、団地共用部等を活用した賑わい、交流の創出、団地活性化に取り組んでまいります。

モルック体験

無印良品による防災イベント

飲食の屋台

屋外飲食スペース

担当者の声

この実証実験には、子ども連れのお客様や近隣にお住まいの子どもたちにも多くお越しいただきました。当日は比較的暖かい冬晴れの一日でしたので、屋外で過ごす気持ちよさ、身近なアウトドア気分を味わっていただけたのではと感じています。日頃あまり使われていない団地の公園でしたが、今回の取組みが賑わい、交流を生むきっかけとなり、多世代交流の場が生まれれば幸いです。

海外展開にあたってまちづくりや住まいづくりのノウハウ等を活用

まちづくりや住まいづくりのノウハウ等を活用した環境配慮の提案

URが蓄積してきたまちづくりや住まいづくりのノウハウ等を活用し、関係府省、我が国事業者及び関係公的機関との連携を進めることで、我が国事業者の参入を促進し、環境に配慮した提案の実現に向けて働きかけています。

事例紹介　アジア４か国会議にてURの環境配慮に関する取組みの情報発信　NEW

令和４年11月、第26回アジア住宅都市関係公的機関会議（４か国会議）が、シンガポール住宅開発庁主催によりオンラインで開催されました。「The Future of Housing」をテーマに、香港住宅公社と韓国土地住宅公社を加えた４機関が、それぞれの取組みについて発表し、意見を交わしました。URからは「UR賃貸住宅における気候変動対策の取組み」をテーマに発表を行い、脱炭素社会における取組みとして、環境共生、低炭素化に取り組んだ「シャレール荻窪」等を紹介。各国からも「低炭素公的住宅設計戦略」、「気候変動に対応した安全で快適なゼロエネルギー建物設計」等をテーマにしたプレゼンがあり、活発な意見交換を実施しました。

URからのプレゼンの様子

循環共生型都市開発等へのニーズに対する支援

我が国事業者等の連携体制構築支援や海外展開にあたっての技術支援、専門家派遣等の人的支援を通して、アジア等の新興国において急速に高まる循環共生型都市開発等へのニーズに対する支援を行っています。

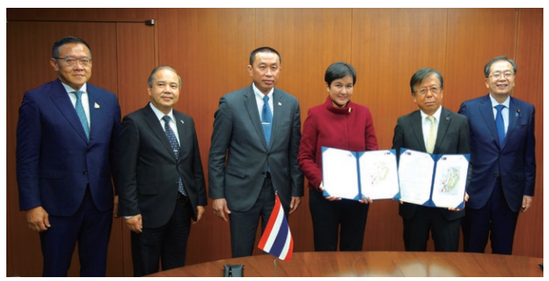
事例紹介　バンスースマートシティ開発プロジェクト　NEW

バンスー地区はバンコクの新たなターミナル駅として令和３年12月に正式開業したクルンテープ・アピワット中央駅（旧名：バンスー中央駅）周辺に広がるタイ国有鉄道（SRT）の所有地約372haの地区です。バンコク中心部から10kmほど北にあり、地区周辺には地下鉄の駅、スカイトレインの駅、バスターミナル等が立地し、TOD（公共交通指向型開発）による交通拠点形成が求められています。タイ政府はバンスー地区をスマートシティとして開発する方針であり、URには日本国内で培ってきた都市開発の経験とノウハウを活かした事業化の支援が期待されています。

令和２年12月にはタイ王国運輸省、SRT及び日本国国土交通省と協力覚書を交換し、バンスー地区の事業推進に関する関係を強化しました。令和４年12月にはタイ王国運輸大臣一行約40名が訪日し、協力覚書の更新（２年延伸）と、今後URが開発ビジョンとリーディングプロジェクト計画を提案することについて、バンスー開発の事業推進主体であるタイ国鉄資産管理会社と覚書を交換しました。

令和２年のJICA調査では、小型EVや交通監視システム等のモビリティ、地域冷房や再生可能エネルギー等のエネルギーによる、緑のネットワークの構築等のエンバイロメント、データセンター設置やIoT技術の利活用等の都市OSの各分野で導入が望ましいスマート要素技術が提案されています。今後は、開発段階に応じて実現性を検討し、実装を図る必要があります。

そのため、URは日系スマート企業11社とワーキンググループを組成し、タイ側から提示されたリーディングプロジェクトエリアの開発時に導入可能なスマート要素技術を検討しています。各要素技術は、快適性、安全・安心、環境配慮等都市の成長を支えるコンテンツとして提案する予定です。検討結果を踏まえて、今後、国土交通省やJICAとともに、リーディングプロジェクト計画をタイ側に提案し、日系企業の技術力を活かしたバンスースマートシティの実現を支援していきます。


令和４年12月覚書交換時の写真

災害復興における景観と周囲との調和に配慮した整備

地域に根差した歴史あるまちなみとの調和に配慮した整備

ワークショップ等を通じてコミュニティ形成を行い、地域に根差した歴史あるまちなみとの調和に配慮した整備を行っています。

事例紹介　福島県大熊町大川原地区復興拠点における総合的な復興まちづくり事業の推進　適応策

平成23年３月の東日本大震災及び東京電力福島第一原発事故災害が重なり、大熊町は長期の全町避難を強いられました。その大熊町において最初の復興拠点として大川原地区が位置付けられました。

大川原地区では、道路・宅地等の基盤整備に合わせ、大熊町役場新庁舎、医療・福祉施設、町営住宅や商業交流施設等も整備する、総合的な復興まちづくりを実施しました。

大川原地区での復興まちづくり事業の概要は以下の通りです。

●基盤整備

大川原地区一団地の復興再生拠点市街地形成施設事業（面積約18.3ha。以下、一団地事業）

●施設建築物整備

町役場庁舎、医療・福祉施設、交流ゾーン（商業施設・交流施設・宿泊温浴施設）、災害公営住宅（92戸）、福島再生賃貸住宅（40戸）

基盤整備は大熊町が事業主体となり実施（URに委託）、施設建築物整備は大熊町が事業主体となり実施しました（住宅については福島県が代行整備）。

基盤整備においては、施設建築物の整備に円滑に繋がるよう、綿密な工程管理を実施しました。その結果、大川原地区及びその周辺の避難指示解除の直後である令和元年５月に大熊町役場新庁舎の開庁、同年６月の災害公営住宅の入居開始を実現しました。その後も医療・福祉施設、交流ゾーン施設の整備を行い、一団地事業の認可から４年余りの短期間でほぼ全域での住宅・施設の立地を実現しました。

特に基盤整備にあたっては、コミュニティ形成を促す住宅地デザイン・親水空間を持った水路のデザイン・里山をイメージした公園のデザインを取り入れ、自然に囲まれ安心して暮らし、豊かなコミュニティを再生できるまちづくりを行いました。

大川原地区では、基盤整備と施設建築物整備の「ハード整備」を早期に実現しましたが、それらに加え医療・福祉施設の運営事業者の運営体制の構築、地域福祉施策を中心としたまちづくり構想の策定、帰還町民交流促進・帰還意向向上に資する情報発信等「ソフト」施策も並行して実施しました。

災害公営住宅

大熊町役場

担当者の声

大熊町の復興はようやくその一歩をあゆみ出したばかりです。復興のあゆみが止まらぬよう、現在事業中の他地区においても大川原地区と同様にURの持つ様々なノウハウを活用しつつ、総合的に支援してまいりたいと思います。

民間事業者等との連携

都市再生における民間連携

民間事業者と連携し、緑地の確保や省エネ機器の設置等環境への配慮を呼びかけるとともに、開発計画書等により環境配慮対策の把握に努めています。

事例紹介　バスターミナル東京八重洲開業

緩和策　NEW

令和４年９月、URが整備を進めている「バスターミナル東京八重洲」の第１期エリアが「東京ミッドタウン八重洲」（開発主体：八重洲二丁目北地区市街地再開発組合）の地下１、２階部分に開業しました。令和７年度（予定）の第２期エリア開業を経て、令和10年度には全体開業を迎える予定です。

東京駅の八重洲側では、バス停が周辺の道路上に散在しているため、鉄道との乗り換えが不便、車両交通や歩行者通行が妨げられている、利用者は雨天時や炎天下でも歩道に並んで待たなければいけない等の交通利便性や環境の観点で課題がありました。

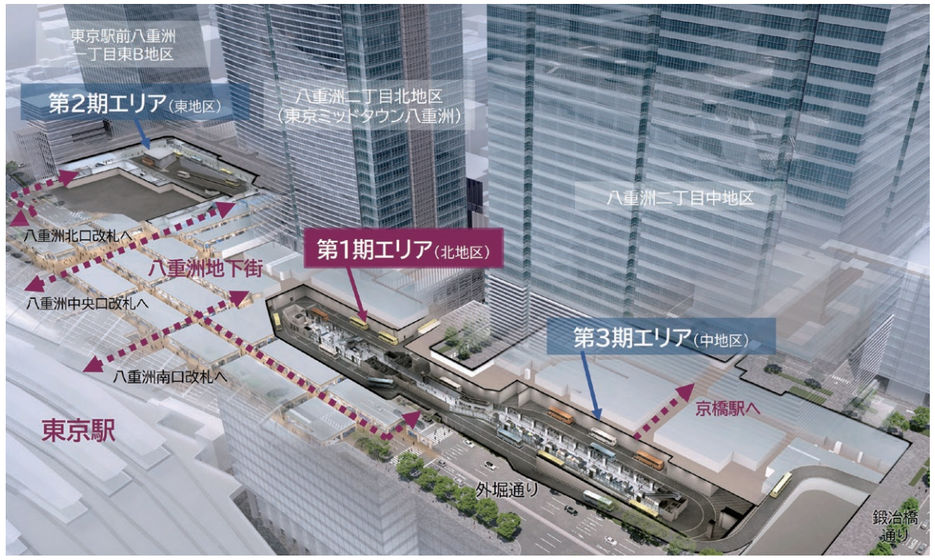
この課題を解決するため、東京駅八重洲側で検討された３つの再開発ビルの地下に、東京駅八重洲側の路上等で発着していた高速乗合バス（約1,200便／日）を全て移行させる大規模バスターミナルを整備することが計画されました。

開業したバスターミナル東京八重洲

ただしその実現には、事業主体やスケジュールの異なる３地区の再開発事業に跨るバスターミナルを整備し、一体的に運営していく必要がありました。

そこで、URが３地区の市街地再開発事業に参加組合員として参画し、再開発事業の進捗に合わせて段階的に整備されるバスターミナルを順次取得し、一体的に保有する役割を担うこととなりました。また民間バス事業者がその運営を行うことで、３地区一体のバスターミナル整備を実現しています。

本バスターミナルの整備により、東京駅周辺の路上等に散在するバス停の集約と鉄道・バス間の円滑な乗換機能の確保を図るとともに、バスターミナル内の各乗降バースを複数のバス会社・バス路線が柔軟に活用することによる輸送効率上昇を実現しています。また、路上駐停車バスの減少に伴う交通渋滞・乗降客の待機列等の緩和、乗降バースの空きがない場合の待機バースの活用（アイドリングストップ）、水素バスの乗入れの試験導入等による排気ガスの削減に貢献しています。



地区の将来イメージ

▼詳しく知りたい方はこちら
9月17日にバスターミナル東京八重洲（第１期）が開業しました！
https://www.ur-net.go.jp/news/20221004_tohto_yaesu.html

社会貢献活動

社会貢献活動の実施

様々な社会貢献活動を実施しています。

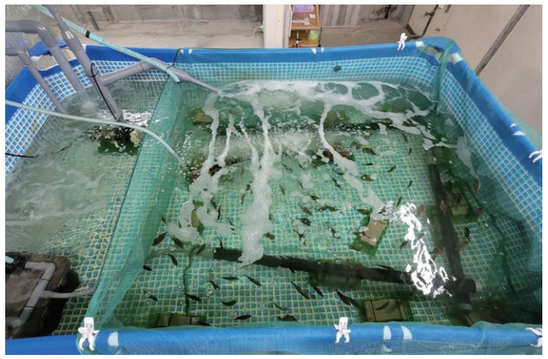
事例紹介　消費地立地型の完全閉鎖循環型陸上養殖システム実用化に関する研究

NEW

UR、株式会社ウイルステージ、日本総合住生活株式会社の三者で「消費地立地型の完全閉鎖循環型陸上養殖システム実用化に関する研究」に取り組んでおり、新多聞団地（兵庫県神戸市）内の空き施設を活用して、令和４年11月より、バナメイエビ・カワハギ・ヒラメの養殖を開始しています。

完全閉鎖循環方式の陸上養殖は、日常的な飼育水の排水がないことから、周辺への環境負荷が小さく立地の自由度が高いといった特徴があります。

この特徴に着目し、住宅地での地産地消（消費地立地）の実現や就業・交流の場の創出等、持続可能で活力のある地域・まちづくりへの団地の活用の可能性を探るべく、共同研究に取り組んでいます。



カワハギ水槽

建物外観

担当者の声

日常的な排水がなく周辺環境に負荷が小さいSDGsな取組みです。既存建物を活用したメニューの一つとして、この取組みを団地の活性化にも繋げていけるよう研究を進めていきたいです。

▼詳しく知りたい方はこちら
新多聞団地（神戸市垂水区）でUR初の陸上養殖がスタート
https://www.ur-net.go.jp/west/press/hndcds000000bxvo-att/20221130_shintamon.pdf

事例紹介　UR職員有志による清掃活動

URでは、UR本社が所在する神奈川県横浜市の北仲通南地区において、職員の有志が「Open Kitanaka-minami Project（通称：OKP）」として、エリア価値向上の検討・実践のため様々な活動をしています。

この北仲通南地区は横浜市庁舎が地区内へ移転してきたことや、隣の地区に商業施設がオープンしたことから賑わいが増しています。こうした地域の関係者とも連携して、地域の方向けにイベントを実施しました。

イベントでは、５月には広島県福山市、11月には新潟県糸魚川市のご協力を得て、URがまちづくりの支援をしている地方公共団体のPR活動を行う等、URならではの企画を実施しました。

また、毎月月末には本社周辺の清掃活動を実施しています。当初はUR職員だけで始まった活動ですが、横浜市の職員も参加する等幅を広げています。

今後ともエリアへの来訪者や近隣の皆さまがURに親しみを持っていただけるような活動を進めるとともに、まちの環境維持に貢献していきます。

清掃活動写真

令和５年９月に「URまちとくらしのミュージアム」開館決定

ヌーヴェル赤羽台（東京都北区）の保存街区で整備中の都市の暮らしの歴史を学び、未来を志向する情報発信施設の名称を「URまちとくらしのミュージアム」とし、令和５年９月に開館することを予定しています。

また、団地初の登録有形文化財（建造物）に登録されたスターハウス等保存住棟４棟は、一般社団法人日本建築学会の学術的監修の下、建物外壁を昭和37年竣工当時の色彩パターンに再現する改修工事が令和４年５月に完了しました。今後は、これからの暮らしの提案を行う他、ストック社会に対応した改修技術等の実証フィールドとして活用します。

新たな展示施設には、同潤会代官山アパートをはじめとする４団地計６戸の「再現住戸」を、集合住宅歴史館（東京都八王子市）から移築・設置する他、都市と集合住宅の暮らしの歴史や変遷等を紹介する壁床４面スクリーン投影による映像展示、模型やパネルを整備していきます。

外観イメージ

▼詳しく知りたい方はこちら

赤羽台情報発信施設「URまちとくらしのミュージアム」に名称を決定。
令和５年（2023年）９月開館
https://www.ur-net.go.jp/aboutus/press/hndcds000000b1va-att/ur2022_press_1027_museum.pdf

映像展示室イメージ

▼詳しく知りたい方はこちら

令和５年９月開館！【赤羽台】URまちとくらしのミュージアム 第１弾
https://www.youtube.com/watch?v=Fmq7dd1cFpk

URひと・まち・くらしシンポジウム

URでは、「URひと・まち・くらしシンポジウム（UR技術・研究報告会）」を毎年開催し、有識者をお招きした講演やパネルディスカッションを通じて、社会的課題を踏まえたこれからの時代のまちづくりや、新たな暮らし方等を議論するとともに、URが取り組む事業・技術研究の報告を行っています。

令和４年度は「都市の暮らしの歴史を学び、未来を志向する」をテーマに、10月27日に会場開催・LIVE配信を行うとともに、11月2～15日の期間でアーカイブ配信を実施し、全国から約1,100人の方にご参加・ご視聴いただきました。

職員研修や社内広報

職員の環境意識の啓発活動

セミナーやレポート、社内研修等を通して、職員の環境意識向上を図っています。令和４年度は、外部講師を招いた断熱勉強会等を開催しました。

都市環境セミナー

●第１回
テーマ：省エネ行動を誘発するナッジ
講　師：宇都宮大学
地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科
助教　糸井川 高穂 氏

●第２回
テーマ：オープンスペースを活かした住みやすい都市づくり
講　師：東京農業大学
地域環境科学部　造園科学科
准教授　福岡 孝則 氏